

の磁場から解放された、庶民愛好の人物の側

三 喵・雑談と口承文芸

面にスポットをあてている。一休は咄の生成、西行では咄の享受に視点が置かれている。第三編「言葉遊びの世界」は、座や場における言葉遊びの実態を、秀句・連歌・咄といった文学のジャンルに応じて掬いとったものである。一口に座興といつても、その言語遊戯は多彩であり、言葉の鍊金師たちの活動を垣間見させてくれる。

第四編「禅林と咄の世界」は、禅宗の学問的雰囲気における咄の生成・享受に触れたものである。その静謐な宗教的空間の中での、咄の熟成のさまがうかがえる。仏教と話との関わりを唱導・説教といった一面から解放し、内部での賞讃に視点を置いた独自なとらえかたといえる。第五編「話の編集と出版」は、本来言い捨ての座の文芸である咄が、交流・贈答といった流通や出版の形態をとる中で、変容していく様子を分析している。咄が座興の場から切り離され、文字という冷却装置を通してするときに、放縱な遊びのエネルギーが削がれ、文雅の方向へ研ぎ澄ましていくと論じている。

右の内容紹介からもわかるように、咄・雑談の世界は多方面にわたっている。そしてその研究の方向も、しだいに完成収束していくというよりは、ますます拡散発展していくようと思われる。そのエネルギーを咄・雑談は内部に抱えこんでいるといえる。ここではそうした多角的な論点のうち、口承文芸研究の視点から問題を提起していきたい。本書の中では、主として第二・三編の論考が口承と深く関わっている。実は以前評者は、著者の論考に触れ、次のように述べたことがある。

著者も、先の引用の論考で、「狂歌咄の俳諧としての発想を、昔話（笑話）を駆使することによって究めてみたい」と、昔話を咄分が多いように思われる。その突破口の一つとなるのが、同氏の「西行狂歌咄論—歌徳説話と狂歌話—」（平成七年）である。これは狂歌の世界から昔話へと大きく踏み込んだけ研究で、文献と口承の接点、一致を丹念に調べ考察を加えている。次に望まれるのは、一致の背景、すなわち相互交通の媒介の解説と思われる。

（「西行伝承の研究と視座」
『西行伝承の世界』）

「西行伝承の研究と視座」と「西行伝承の世界」を指摘するが、なおそれが現在今まで伝承

文献と口承との一致の指摘は、柳田国男の

昔話研究以来、有力な方法としてより精緻になってきたが、問題はその一致をどのように意味づけ、そして展開させていくかである。

「一致の背景、すなわち相互交通の媒介の解説」と述べたのは、こうした事情を踏まえて書いた多角的な論点のうち、口承文芸研究の視点から問題を提起していきたい。本書の中では、主として第二・三編の論考が口承と深く関わっている。ともすれば、口承の立場からは歴史的な時間を確認できたことで了としたり、他方文献の側では、その記録が特殊なものではないことの例証に利用されたりするだけに終わる場合もある。

著者も、先の引用の論考で、「狂歌咄の俳

諧としての発想を、昔話（笑話）を駆使することによって究めてみたい」と、昔話を咄

の発想確認の補助としての利用にとどめていたようである。同様のことは、第三編第四章「へはね字」の遊びでも見られる。笑話

「りん」の歌が、『多聞院日記』や咄本に見えることから、「それならばこの『りんの歌』なる昔話は、およそ室町期の狂歌にまで遡ると考えてよからう。室町期の言葉をそこ

びが、民間説話として現代にまで伝承されていると言つていい」と、その歴史的位置づ

されていることの意義を十分に掬いあげていよいよと思われる。

る。しかしそこでは単に話を機械的に再生しているのではなく、一回ごとの生命をもって

的様相は明らかではないが、そう考えなければ同じ話が相互にあることの解釈がつかない

ただここで著者の関心は、「この「へはね」の遊びが、どのような場から生まれてきただか」を追究することにあり、「りん」が、当時中国留学の禅僧などが伝えた漢字の唐音でハイカラな響きがもてはやされ、それを連歌

語り手から聞き手へ流れ、さらにそれが語り手にフィードバックして、語りは洗練されていくのである。決して退屈な復習の場ではない。語りが繰り返されながらも新鮮であるのは、例えば笑話でいえば、その笑いにいたる秘

のである。ともあれ、そうしたダイナミックな語りの場の把握こそ、話・雑談の場を豊かなものとするはずであり、翻つてそれは口承文芸の語りの場をも照射することになると思われる。

師たちが「連歌聯句果てたあとで、漢語を吐きの種として笑い興じた」ものと解するところ

やかな興奮と「精神のごわはりの解消」（ベルグソン）を要請する状況が変わらず存在す

四 今後の展開に向けて

場であるという著者の論点は明解で、そのことに異論はない。

どりながらもその向上をやめないからといえる。生命体としての話を生かす場が語りの場

てきたが、角度を変えながら再説したい。

ところで、それを踏まえた上で問題としたのは、連歌集での場での「りんの歌」が、なぜに「児同士」「児と法師」などといった人物設定を取るのか、つまり話が「和尚と小僧

であると言ひ換えることができる。伝承の場はそうした動態の場であるからこそ、話は状況に合せながら洗練完成していくのである。こうした語りの場の特性をとらえながら、

茶会記を読む楽しみは、記事の奥から聞えてくる緩々とした咄の座の笑いざわめきに思いを馳せることであろう。（「夜咄の俳諧」）

ある。咄・雑談には、『沙石集』にあるような「法師と小児」の枠組へと咄を再構成し、洗練完成させていくような機能が内在しているのではないか。咄の座にはそうした機能が潜在的に組み込まれていたように思われる所以である。

のではないか。文字の記録は標本と同様、その時点で生命の断たれたものである。それに息吹を吹き込む方法は他にもあらうが、咄々・雑談の世界に口承の語りの場を援用していく方法は有効であることを訴えた。さらに両者の関わりは同時代の中でも、決して孤絶

昔話や笑話の語りの場は、そうした機能を繰り返しといった形で顕在化している場であ

したものでなく、話の相互移動などの関係をもつて交通していたのではないか、その具体

棠三先生の晩年近くにそばで教えを蒙った一人として、それを十分生かせないでいる間に

譜

茶会記を読む楽しみは、記事の奥から聞えてくる緩々とした咄の座の笑いざざめきに思いを馳せることであろう。（夜咄の俳諧）

文商の話題を読む未修力の必要性を説いたこの一文には、同時に咄の座を堪能している著者の素顔・実感が感じられる。その著者を咄・雑談の世界に導いたのが、鈴木棠三先生である。著者は「あとがき」で力説していくが、しかしまつたく面識がなかつたといふ

棠三先生の晩年近くにそばで教えを蒙った一人として、それを十分生かせないでいる間に

遠くの学究が深奥に迫っているとは、なんと
も面白映ゆいものである。

その棠三先生の仕事の基本は、膨大なカーネギーに基づく徹底したデータ主義であった。権威やなまじいな理論は先生の流儀ではなかつた。そしてそのデータは、口承、文献のどちらにも博搜していた。それは言葉遊びが、耳と文字との両方に関わっている世界であるといふ認識のもと、それを担つてきた庶民の言語意識への共感に基づくところから出発していたように思われる。

一体、この種の言語遊戯は、文学としては、低俗なものとしか評価されないのが常であります。が、言語遊戯が発生する事情を考えると、言語生活における反省、ことばを吟味する興味に根ざしていることは言うまでもありません。ただ、それが言語のみに関する意識に止まつて、文学意識にまで昇華されていないために、低俗と評されるのであります。それにもしても、そのような言語への関心が、表現の発達に寄与しない道理はなく、またこのような好尚が、民衆を文芸に近付けるのに大きな働きをしたことを否定するわけには行きません。

書評

橋本裕之著

『王の舞の民俗学的研究』

保坂 達雄

王の舞は、袴襷装束を着用し鳥甲に赤い鼻高面をつけて行列を先導し、祭礼芸能の中で田楽・獅子舞などに先立つて演じられた民俗芸能の一つである。歴史的には平安末期から鎌倉初期にかけて奈良・京都の大社寺で行われた中世芸能であったが、現在は福井県の若狭地方を中心にして滋賀・京都・兵庫などの祭礼に伝えられている。時間にして一時間足らずの、祭礼芸能の中の一演目でしかない王の舞を研究主題にして、著者の橋本裕之氏は博士論文として早稲田大学に提出した。題して

『(い)とば遊び辞典』「はしがき」）ませて欲しいと願うものである。鈴木棠三はここに棠三先生の言を持ち出したのは、いつの日か鈴木さんの掌から離れて、あらためて咄・雜談論の総合を期そう。」とする著者の意気込みへの期待である。文献の渉猟に合せて、今以上に口承の世界にも目を向け、そのデータを収集して咄・雜談の世界を膨らませて、それは著者自身がよく知っているはずのところではあるが、あえて高いハードルを設定した著者の意気に、咄・雜談の新展開を期待したい。

(三弥井書店、一四〇〇〇円)
(はなべ・ひでお／國學院大學非常勤講師)